

研究ノート

学生と初任教師のための初年次教育

宮本 敬子

日本福祉大学 非常勤講師

The First-Year Experience for University Students and Novice Teachers

Keiko MIYAMOTO

Part-time Lecturer, Nihon Fukushi University

Keywords : 初年次教育, 初任教師, 非常勤講師

問題提起：初年次教育を初任教師(初任非常勤講師)のトレーニングの場とみなすことは可能か？

初年次教育は大学1年生に対する移行期支援を目的とした、学生の自発的な学びを始動させるための基礎教育として重視されている¹。日本における初年次教育の試みは比較的新しく、各大学とも、より良い初年次教育を目指して試行錯誤を重ねているのが現状である。そして、初年次教育の重要性に関する教員間の合意形成については概ね達成されたと考えてよいだろう。しかし、その実施内容、とくに目指される到達点については教員によって想定が異なっているように思われる。2011年度より日本福祉大学における初年次教育科目である「総合演習」を初任非常勤講師として担当することになった筆者が複数のベテラン教員に対して聞き取りをしたかぎりでは、初年次教育においてどのような基礎能力をどこまで開発すべきか、学習達成レベルをどこに設定すべきかに関して、各教員の見解は一致していなかった。

ただし、この聞き取りは本稿執筆のためのアンケートとして実施したものではない。初年次教育を初任教師と

して担当した2011年度を通して、筆者は機会のあるたびベテラン教員に教育方法や学生の接し方について教えを乞うたのである。「総合演習」を担当することによって、筆者は多くの教員(総勢25名)と共通の授業を持ち、その教員たちと共通の会議に出席し、共通の教員控室で顔を合わせるようになったため、筆者は初任非常勤講師の身上でありながら、多くの専任教員(そしてベテラン非常勤講師)からアドバイスを受ける機会に恵まれた。どの教員も指導方法に思い悩む初任者の問いかけに真摯に応じてくれたのであり、筆者は各ベテラン教員からそれぞれに異なる教授法のコツを聞き出すたびに喜びを覚えた。そしてこの過程で二つのことに気がついたのである。

ひとつは、初年次教育における学習達成目標について、教員間の合意形成がかならずしもなされているわけではない、ということである。筆者が各教員から聴取した際にそれぞれ意見がかなり異なっていたことについては、筆者の質問の仕方によるところも大きいことを言い添えておく必要がある。もし筆者が、本学の理念として、あるいは、一般に初年次教育では何を指すべきか？と問

うたのであったら、ある程度一致した解答を得られたかもしれない。だが筆者は担当クラスの状況と授業内容を説明した上で教えを乞うたため、各ベテラン教員は筆者に実践可能と思われることを選択的に助言したものとされる。そのための見解の不一致もあったと考えられるのだが、筆者にはそれだけではない目標・方向性の違いがあるように思われた。むしろ大学教育においては教育の多様性とともて教員の教育理念の多様性もあってしかるべきである。また、あまりに事細かくマニュアル化した授業を教員に実行させることで教員のパフォーマンスが有意に向上するとは考えにくい。しかし、近年の大学教育における単位認定に関する「評価の一貫性」に対する要請の高まりを考慮すると、とくに初年次教育のような基礎的な授業における単位認定についてはある程度評価の一貫性を保証する枠組みを構築する必要があるように思われる。

二つ目の発見は、日本福祉大学において初年次教育を担当することが初任教师たる筆者にとり非常によい経験であった、ということである。これを発見とは大袈裟だが、筆者はここからさらに踏み込んだ主張をしようとしている。それは、初年次教育の一部を初任教师（初任非常勤講師）のためのトレーニング場として開放せよ、という主張である。これはとくに若手非常勤講師が各大学で初年次教育を担当する機会の増加を求めるものであり、若手非常勤講師が教育経験を積むために初年次教育に参加することをひとつの権利として求めるものである。

初年次教育が「新入学生の学び」を支援するためのものであることは誰もが認める大前提である。高校教育から大学教育への移行を支援することで学生を自主的な学びに導き、大学教育に適應させ、学生の2年次以降のより豊かな学びを可能とするための教育、それが初年次教育に課せられた目的である。これに対し、筆者の主張はこの大前提から逸脱するものとなりかねない。学生の能力がもっとも飛躍的に向上する大切な時期の教育を一定数の未熟な初任非常勤講師に任せよというのである。良心的な専任教員は眉をひそめるであろう。そしてその反応自体はまったく正しい²。だが、筆者は初任教师として日本福祉大学で初年次教育に従事することによって教育に対する肯定感・自信を獲得したことから、この経験をできるだけ多くの初任非常勤講師が体験することを願うようになった。そうして筆者は初年次教育参加への感

謝と共に、「新入大学生のための初年次教育」と「初任教师（非常勤講師）のための初年次教育」を結びつけるこの着想を得たのである。

初年次教育を部分的に初任非常勤講師のトレーニング場として開放し、さらに、ベテラン教師が初年次教育を通して初任非常勤講師をトレーニングするという理念を大学教員間で共有することははたして可能であろうか。そもそもこのように考えることは許容されるのだろうか。本問題提起は、平素見落とされがちな「初任非常勤講師の教育スキル向上」という問題について、大学教員に一考を乞うものである。

1. 日本福祉大学の初年次教育における「初任教師のトレーニング」

前節では、初年次教育が初任非常勤講師の教育スキル向上に適していると主張すると共に「ベテラン教員が初年次教育を通して初任非常勤講師をトレーニングすること」を要請した。しかし、筆者がここで想定しているトレーニングとは、ベテラン教師が初任非常勤講師に対して特別に時間を割いた上で教育法を手取り足取り伝授する、というものではない。日本福祉大学において筆者がベテラン教員から受けた「トレーニング」はたとえば次のようなものである。

2011年4月、筆者は非常勤講師として日本福祉大学の初年次教育（本学での名称は「総合演習」）を担当することになった。最初の演習の終了後、教員による「総合演習担当者会議」が開催された。ここにおいて「総合演習」を担当するすべての教員と顔を合わせるようになった。会議は教員の自己紹介にはじまり、それから担当するクラスの様子、学生の傾向などの情報を交換しあった。そして年間行事の予定を確認して第一回会議は終了した。

以上のベテラン教員にとっては何の変哲もない通常の会議が、初任非常勤講師にとってはトレーニングとなる。まず、専任教員から同じ仕事をするチームの一員として扱われ、何かと声をかけてもらうことで教師としての自覚が高まる。そして、会議の場でのベテラン教員たちの語り口やちょっとした表情やしぐさ、問題の指摘の仕方、ユーモアのある一言、そうした非常に些細なあらゆる物事から初任教师は多くを学ぶ。大学院における教員と学

生の関係とは異なる、教員と教員の関係だからこそ見聞きできるものがそこにはある。

ひるがえって、一般的な講義科目を担当する初任非常勤講師にはこうした機会がほとんどないのが常態と言ってよいだろう。よほど社会的な人物はともかく、ごく普通の初任非常勤講師がベテラン教員と長々話し込むという光景は近年あまり見られなくなっているはずである。また、大学によっては非常勤講師だけの控室が用意され、専任教員の出入りが一切ないところもある。筆者はそうした大学のひとつで非常勤講師として勤務しているが、講義を終えて非常勤講師控室に戻ってもその大きな部屋には誰もいない。自分以外の誰も入室しないのである。控室を出れば専任教師とすれ違いもし挨拶などを交わすが、そこで立ち止まって「世間話でもどうでしょう」という展開になることはまずない。また筆者がさらに別の大学に非常勤講師として勤務していたとき、その大学の非常勤講師控室には比較的多くの講師が在室していて各自講義の準備に動んでいたのだが、その場で情報交換をしたり、まして教育技法について話し合うような雰囲気ではまったくなかった。勇を鼓して対話を求めれば応じてもらえたかもしれないが、そもそも筆者自身が授業の準備に手一杯でその余裕も時間もなかったのである。

その点、日本福祉大学において「春季セミナー」と呼ばれる、4月の演習開始後すぐに行われるゼミ合宿では大変有意義な時間を過ごすことができた。この合宿は新入生と同じ程度に、あるいはそれ以上に初任非常勤講師たる筆者に利するものであった。しかし、ここでもベテラン教員から特別なトレーニングを受けたわけではない。ただ、教員同士で長時間対話する機会があったというだけのことである。宿泊施設で同室となった教員たちと何時間もゼミの状況や自身の研究について語り合った。さらに、合宿に参加した教員全員による会合の場も用意され、そこでは、より良い教育のために何ができるか、また何をすべきか、ということに関するベテラン教員の知見を拝聴することができた。一般的な講義科目を担当する非常勤講師がこのような機会にあずかることは稀であるため、初任時にこうした体験ができたのは幸運と言える。

さらに、日本福祉大学の「総合演習」では、たびたび複数のクラスで合同の演習を行っている（2012年度には、たとえば12クラス合同の映画鑑賞・議論の場が持たれた）。ベテラン教員による呼びかけをきっかけに合

同演習が行われることもあれば、非常勤講師からの提案で合同企画が開催されたこともあった。このような合同演習によって教員間で有益な情報や教育スキルを伝達することが可能となる。複数の教員が集って合同演習のための予定を組み、実行し、終了時には互いに反省点を述べ合う。このような取り組みが自然発生的になされているのが日本福祉大学の「総合演習」の特徴である。

そして、「総合演習」の年間行事の締め括りとして年末に学生による研究発表会「全体発表会」が設定されている。これは3つのゼミが合同で1年間の学習成果を大教室の壇上で口頭発表し合うという内容である。その準備のために、担当教員は発表会の5ヶ月ほど前から何度もミーティングを行う。くりかえし打ち合わせしたのち12月の合同発表会の日をむかえるわけだが、発表会当日に複数のゼミの学生の発表を目の当たりにしたとき、初任教師は自分のクラスの教育に欠けている要素を否応なしに自覚させられることになる。このとき初任教師は自分の教育技法の改善を誓わざるをえないだろう。また、ベテラン教師の采配を間近に見て、自分もその手際の良さを身に着けたいとも願うだろう。複数の教員による協同の良い点として、初任教師がその経験によって自身の向上心に火を灯すことがあげられる。

こうして本学の「総合演習」を担当する初任非常勤講師は複数の教員によって自然とトレーニングされることになる。「総合演習」を通じてそれぞれに異なる研究分野の教員同士が協同する経験は、初任教師自身の学術研究において他分野の研究者とコラボレーションすることの練習ともなる。実際、合同演習によって筆者は他分野の研究者と協同することの楽しさとその成果が豊饒たりうることを今更に学び知ったのである。筆者に限らず、われわれの世代の研究者は協同することが不得手になってきている。これには近年の大学院生の急激な増加も関係しているはずである。近年、各大学院の院生の定員が大幅に増した上、そこには出身大学が異なる学生が多数集まることとなった。その結果、たとえばあるゼミナールに所属する院生の出身大学が全員異なるという事態も起こるようになった。さらに一頃に比べ異常に多忙となった指導教官たちが院生にかかる指導時間は大幅に減少している。そこで出身大学の異なる院生同士で結束するかという、そうなる場合もあるし、そうならない場合もある。そしてそうならないケースのほうが増加しつつある。むしろ研究者は自助努力すべきであるが、若手研究

者における協同/共同能力の涵養については、彼らが大学院を終了した後も、各勤務校のベテラン教員による「教育」が必要な段階に来ているように思われる。

以上が日本福祉大学の初年次教育を担当した過程で筆者がベテラン教員から受けた「トレーニング」の概要である。同じ時間に、同じ条件で、同じ授業を担当することで、初任非常勤講師とベテラン教員が共通の話題・共通の問題意識を持つことができ、これを前提とした対話を行うことが可能となる。そして、合宿や定例の会議が開催されることにより、初任非常勤講師とベテラン教員に一定の対話時間が確保され、これによってベテラン教員から初任非常勤講師へと教育に関する知識が伝達される。極言すれば、初任非常勤講師とベテラン教員が自由に対話できるような一定の時間と静かな場所さえ与えられれば、両者の間で教育に関する知の伝達が自然と行われるのではないかと思われるが、それでも「総合演習」を担当すること以上の効果は望めないだろう。

2. 初任非常勤講師が担当する学年として適しているのは「一年生」である

日本福祉大学における初年次教育「総合演習」が、初任非常勤講師がベテラン教員から教育スキルを学ぶ場として非常に良い環境であることについては賛同を得られるだろうと思う。少なくとも、初年次教育は初任非常勤講師にとり、教育に関する多くの基本事項を習得できる絶好の機会であることは間違いない。しかしながら、新入学生の教育という初年次教育の本来の目的を思い起こせば、初任非常勤講師に初年次教育を担当させることに対する非難は専任教員の義務と思われるかもしれない。実際、「初年次教育は専任教員がやるべきもの」、「非常勤講師に担当させることには問題がある」、「非常勤に担当させることは専任教員の怠慢と見なされかねず、大学の面子に関わる」などの認識を持つ専任教員はむしろ多数派であろうと推測される。そこで以下では、初任非常勤講師に初年次教育を担当させることの是非を問うための判断材料とすべく、初任非常勤講師が初年次教育を担当することによって生じる「初任非常勤講師にとってのメリット」と「学生にとってのデメリット」をひとつずつ挙げることにする。

まず日本福祉大学の場合、初任非常勤講師が担当する演習は初年次教育のみである。2年次以降を担当する「ベテラン非常勤講師」は存在するが、初任非常勤講師が担当できるのはあくまで1年生だけである。そして、この1年生を担当することが初任非常勤講師にとり最も有益であると筆者は考える。その理由について筆者の経験から述べておきたい。

筆者は2008年度と2009年度に一橋大学社会学研究科専任教員のもと社会思想史講義のティーチング・アシスタント(TA)として、講義を受講した2年生~4年生の学生(社会学部、経済学部、法学部)を対象に論文指導を行った。この講義を担当したTAは筆者を含め5名であり、とくにTA統括者であった筆者は受講生全員と直接連絡をとる機会が一番多かった。筆者らTAのチームは繰り返しミーティングをすることで情報交換を密に行った。この二年間にわたる論文指導を通して5名のTAの見解が一致したことのひとつは「2年生が最も指導しやすい」ということであった。TAの指示内容を比較的素直に実行したのも、最終的な論文提出にまで漕ぎ着くことのできた比率が最も高かったのも2年生であった。2年生のレポートには、3年生や4年生のそれよりも大学院生のTAが容易に指摘できる間違い・改善点が多く、それを丁寧に指摘すると学生のTAに対する信頼と親密さが向上する傾向があった。これに対し、4年生は就職活動に気をとられていたこともあるだろうが、2年生に比べるとTAの指導の影響を受けにくい傾向のあることが報告された。TAが自らの教育に対する自尊心や達成感を獲得することができ、かつ指導する内容が多いためにかえって学生から学ぶところが多かったのは2年生であった、ということで5名のTAの意見は一致した。そして、半期の授業で複数回レポートの添削をしたり、メールのやり取りをしたり、演習のように口頭発表をさせたりすることを通じて最も成長したのも2年生であった。基本的な学問スキルの伝達ということに限定すれば、学年が下であるほどTAや初任教师にとっては教えやすく、また目に見える成果が出るために非常にやりがいを覚える、ということは言えるだろう³。そして筆者は日本福祉大学で1年生の演習を担当する機会を得たことでこの確信を深めたのである。

初任非常勤講師にとり初任次教育は学生から学ぶとこ

ろがとても多く、自分の講義内容の改善にも役立つ。初任教師の講義は言葉の使い方、説明の仕方が難解になる傾向、端的には文字通り「教科書的」（教科書をそのまま読み上げるような語り口）になる傾向があるが、そのようなやり方で一方的に講義を行ったあげく、学生が講義内容を理解していなかったことに試験の結果を見るまで気づけないことがある。想像力が足りないとその試験結果を目にしてもそれが自分の授業の拙さのゆえであると十分に自覚できないこともある。筆者の非常勤講師一年目の哲学講義がまさにそうであった⁴。だが、双方向的なやり取りを行う「演習」では学生の理解度を確認する機会が頻繁にある。そしてこのとき、「講義」で自分が学生に理解させるのに失敗した理由が判明する。

その初任教師からすると誰でも知っていると思われた常識が、学生たちにとっては未知のものであったり理解不能のものであったりすることに、講義では気づけなくても演習では明らかとなることがある。少人数の演習においてはその他にも、初任教師には易しいと思われた資料を学生に読ませて内容について質問してみたものの、多くの学生にはその内容がほとんど理解できていなかった、その前に漢字が読めなかった、小さなカードに感想を書かせてみたものの毎回一行しか書けない学生がいる、などのことに気づくことができる。こうした経験の積み重ねを経てようやく、初任教師は自身の授業のやり方に問題があることを理解する。反省した初任教師の言葉づかいや説明の仕方は次第に慎重なものとなり、そのうち彼は説明の際にはわかりやすいたとえ話をつけ加える習慣を身に着けるかもしれない。そしてこうした努力を続けるうちに学生の反応が少しずつ変化する。寝る学生が減り、教師に顔を向ける学生が増える、意見を書かせる際の字数が増え、質問に対しては適切な解答を口にするようになる。こうした経験によって初任教師は以前の授業の失敗が自分の授業の拙さに起因することを理解して恥じ入ると同時に自分の教育者としての成長に喜びを感じる。

このように初年次教育は、初任非常勤講師が自身の成長を実感しやすく、また彼が教師としての自覚と自信を身につけるのに最も適した授業形態である。なにより初任教師はこの経験を通して、できるだけ多くの学生に言葉が届く授業の必要を理解するようになる。以上が初年次教育に関わることで得られる「初任非常勤講師にとってのメリット」である。次に初任非常勤講師が初年

次教育に関わることで想定される「学生にとってのデメリット」を考察する。

3. 「大学生の在籍継続」と「大学生と大学の学問的・社会的統合」

初年次教育を専門的に研究している川嶋太津夫は、大学生のリテンション（在籍継続）、すなわち、大学生が入学後に大学での学習を継続するためには、学生が大学に学問的に統合され、かつ、社会的に統合されるという二つの要件を満たす必要のあることを指摘している⁵。学生が「学問的に統合」されていない状態にある場合、期末レポートの書き方が分からず課題を提出できなかったり、学習が不十分で期末試験で単位取得に必要な点数を取れなかったりすることになり、それによって一定のGPAを維持できなければ退学処分となることもある。また、学生が大学に入学しても友人ができなかったり、孤独を感じるような「社会的に統合」されていない状態にあれば、その学生はやはり大学を離れ、学びを放棄したり、自分にとってより快適な他の大学へ転学したりすることになる場合もある。川嶋は、この学問的・社会的統合の問題は新入生に限らないが、高校から大学に移行したばかりの年である「初年次」に一番顕在化し、危機の程度も高いという⁶。

また川嶋は、新入生を対象に6月に実施した「大学への適応」に関する調査における「大学入学後に困ったこと」として一年生が指摘するものに注目すると、大学新入生が入学後に最も戸惑うのは、単位制度、授業時間の長さ、履修登録、学習スタイル、ノートの取り方など、高校と大学の教育システムの違いに関するものであり、さらに、大学の施設・設備の利用方法、友人問題、教員との接し方といった対人関係を含む「社会としての大学への適応」についても学生は問題を抱えていることがわかると指摘する⁷。

上述の問題を踏まえて、川嶋は「初年次教育」を「新入生の大学への学問的・社会的統合を支援することによって、高校から大学への移行を円滑にするために導入されたプログラム」と定義している。筆者もこの定義に賛同する者であるが、しかし、ここには初任非常勤講師が初年次教育に関わることを拒むものがある。初任非常勤講師には学生の社会的統合支援の側面で十分な役割を果たせない可能性があるからだ。川嶋は、新入生に対し「大学への学問的・社会的統合を支援する」ことを目的とし

て設置された最初のコースとして、アメリカのサウスカロライナ大学の「フレッシュマン・セミナー」を挙げ、このコースの「6つの目的」を紹介している⁹。

- (1) 学問上の成功：大学での学習に必要なノートのとり方、時間管理、論文執筆の方法、図書館での資料の探し方など、いわゆる「学習スキル」を、多くの課題や期末試験などを通じて習得する。
- (2) 人間的成長：人種や価値観の異なる多様な人々との交流を通じて多様性の意味と他者への敬意を理解するとともに、自らの価値観を確立し、将来責任ある市民として求められる批判的思考力や意思決定能力を育む。
- (3) 最新の技術：入学と同時に配布されるメールアドレスを使って、学生同士あるいは担当教員と情報交換したり、ウェブを利用した資料・データ収集のノウハウを習得したりして、大学の有する学習資源を最大限に活用できるようにする。
- (4) 大学コミュニティへの参加：様々なクラブ、学生団体、コミュニティ団体、リーダー養成プログラム、あるいは各種催しの紹介を通じて、さらには担当教員、ピアメンター、大学院生のTAとの親密な交流を通じて、大学コミュニティの一員となっていく。
- (5) 大学内外の情報紹介：どこに履修届けを出せばいいのか、あるいは数学や英語がわからないといった勉学上の困りごとや、病気になったときにどの病院に行けばよいかなど、学生が必要とする情報の提供。
- (6) 将来の進路：将来の進路が未定な学生は、専門との関連が深いセミナーを受講することによって、進路についてより深く考える機会を与える。

以上の「フレッシュマン・セミナー」の「6つの目的」は初年次教育の理念として参照すべき良い範例と言えるだろう。学生の大学に対する「学問的・社会的統合」を支援するための内容としても納得できるものである⁹。しかし、初任非常勤講師が以上のことを実行することは困難である。初任非常勤講師は学生の社会的統合を支援するために必要な知識を欠いているだけでなく、たいていは講義時間を終えると別の非常勤先の大学へ移動したり、院生であれば自分の大学院へ移動したり、毎日のアルバ

イト（学習塾やコンビニや飲食店など）へ急いだりするため、用事がないかぎり非常勤先の大学に長時間滞在することはなく、滞在したとしてもそれは講義のある曜日にかぎられる。また初任非常勤講師には、初年次教育で担当している学生をその上の学年の学生と結びつけたり、大学院生のTAと結びつけたり、また担当学生の望む進路に詳しい教員と結びつけたりすることは困難であり、したがって初任非常勤講師には学生を大学コミュニティの一員として社会的に統合させるための支援を十分に果たせないだろう。このように考えてゆくと、初任非常勤講師にとっては非常に不都合な結論が導かれる。

初任非常勤講師はこの「6つの目的」の(1)は果たせるであろうが、(2)は経験不足のためベテラン教員のようにはいかないだろう。(3)は可能であるが、低収入であることの多い初任非常勤講師（講師としての収入は年に100万円に満たない者のほうが圧倒的に多い）に対して勤務時間外に学生の相手をどこまでさせてよいのか、という問題はあるだろう。(4)は勤務大学の出身者ではない初任非常勤講師にとっては困難である。(5)は遠方から来る初任非常勤講師にはあまり期待できない。(6)についても、その初任非常勤講師が学生の所属する学部学科と同じところに在籍していた場合には支援が可能だが、たとえば、社会福祉学部の初年次教育を担当する哲学講師（筆者がそうである）が社会福祉関係の進路で迷っている学生に適切な助言を与えることは困難である。

以上のことは当然ながら、すべて学生にとっての「デメリット」となる。ベテラン教員が担当するか初任非常勤講師が担当するかによって、とくに学生の社会的統合支援の点で大きな違いが出てくる可能性があるのである。また授業内容についても、初年次教育を担当する教師には、学生の「知識注入型の受動的学習」態度をいかにして、「分析型、問題発見型、問題解決型、探求型」にするかということが求められているのだが¹⁰、初任非常勤講師には初年次教育を実践する過程で、学生の反応をみながら試行錯誤し、自身の授業スタイルを徐々に「問題発見型、問題解決型」へと改善していくことができるという点でメリットがあるものの、その最初の授業に当たった学生にすれば、その試行錯誤の時間に付き合わされる時間はデメリットとなりかねない。

さいごに：それでも初任非常勤講師に初年次教育を担当させるか？

このような考察を経た結果、筆者の当初の権利要求の声は弱々しいものとなる。以上のことから明らかになったのは、初年次教育を初任非常勤講師が担当することは、初任非常勤講師にとっては自分の教育方法をより良いものに改善できる点で大きな利益があるものの、学生にとっては、とくに「大学と学生の社会的統合」に関する支援を十分に受けられない可能性がある点で不利益を被るかもしれないということであった。しかし、最後にひとつだけ指摘をしたい。

本稿の冒頭で筆者は、教員間で初年次教育における学生の学習達成目標をどこに設定するかの場合の合意形成がなされていないことに言及した。先のサウスカロライナ大学における「フレッシュマン・セミナー」の「6つの目的」はかなり高い目標と言え、この要件を満たしている日本の大学はほとんどないはずであるが、個人レベルで見れば、これらを満たしているように見える教員は日本福祉大学にも存在する。その一方で、自己表現力が低く、文章を書くこと自体に困難を覚えているような学生の基本的な学力を補うことを重視すべきと考える教員は「6つの目的」のうち(1)だけでも達成しようと、たびたび文章添削をしたり授業後に個人的に論文指導を行ったりする地道な努力をしている。少なくとも筆者はこれを自分の使命と考えて実行している（逆に言えば、筆者の場合に限って、これしかできないということである）。とくに、日本福祉大学の場合、学生の社会的統合の支援を重視しこれを実践する教員と、学生の学問的統合の支援を重視する教員とに大きくわかれており、さらには、学習達成目標について明確なラインを設定していないため、たとえば、期末レポートで要求される字数がゼミによって大きく異なるということが実際に起こっている。このことは単位認定における「評価の一貫性」という点で問題となるだろう。繰り返しになるが、大学教育における単位認定に関する「評価の一貫性」に対する要請は年々高まっており、とくに初年次教育のような基礎的な授業における単位認定についてはある程度評価の一貫性を保証する枠組みを構築する必要がある。しかし、初年次教育の理念をあまりに高いものに設定した場合、単位認定に際しての評価のばらつきがさらに悪化し、結果的に「評価の一貫性」をかえって保証できない状況に陥りかねない。

初年次教育については、現在のところ大学によって内容が大きく異なり、またその学習到達目標にも曖昧なところがあるのが現状である。そして初年次教育に初任非常勤講師をどのように参加させるかに関しては、「初年次教育の目標をどこに設定するか」ということが大きく関わってくると思われる。筆者はこれから初任非常勤講師となる新人の教育スキル向上を願い、初任非常勤講師が初年次教育に関わることを希望している。しかしながら、初年次教育の目標・理念が明確に規定された日に初任非常勤講師がこれを満たすことができないとなれば、この提案を取り下げねばならないだろう。

注

- 1 山田礼子「日本における初年次教育 10 年を踏まえ、次の展望は」（河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか——全国大学調査からみえてきたこと——』東進堂、2010年、所収、248 - 263頁）2004年以降、初年次教育の概念が整理され、「高校から大学の転換期あるいは移行期を支援していくのが初年次教育である」という流れが定着してきた（同書、250頁参照）。
- 2 谷口哲也、友野伸一郎「河合塾からの初年次教育調査報告——学生を変容させる初年次教育はいかにあるべきか——」（前掲書所収、5 - 81頁）は、さまざまな大学の初年次教育担当教員からの報告をとりまとめているが、初年次教育における非常勤講師の役割への言及はなされておらず、むしろ専任教員がこれに当たるべきことを表明する記述がみられた。たとえば、神奈川大学の見解として次のような意見があった。「[本学は] 学生が多く、非常勤[講師]も『FYS: [初年次ゼミ] を担当させることを検討しましたが、『FYS』の理念からずれるという理由で、現在では専任教員のみとしています。」（[]内補足宮本）
- 3 宮本敬子「講義・演習連結型授業報告（2008年度冬学期「社会思想」）2. TA 統括者の報告」（『2008年度一橋大学教育プロジェクト講義 = 演習連結型授業の創出——「単位の実質化」の実質化——報告書』一橋大学、2009年所収、14 - 21頁）
宮本敬子「授業報告 2009年度冬学期「社会思想史」RA 統括者の報告」（『2009年度一橋大学大学戦略推進経費プロジェクト講義 = 演習連結型授業の創出、実践、普及——単位実質化の試み——報告書』一橋大学、2010年所収、48 - 57頁）
- 4 教育学を体系的に学んでいない若手の初任非常勤講師の講義は悪い意味で難解になりがちであるため（まじめに取り組むあまり学術書を朗読するような話し方を教壇でしてしまうことがあるため）、「講義」について言えば若年の初任非常勤講師に向いているのはむしろ3、4年生であると筆者は考える。
- 5 川嶋太津夫「初年次教育とその評価」（『リーディングス日本の教育と社会 12巻高等教育』日本図書センター、2009

年所収, 137頁: 出典『大学教育学会誌』第29巻第1号,
大学教育学会, 2007年)

- 6 同上.
- 7 同書, 136 - 137頁.
- 8 同書, 137 - 138頁.
- 9 しかし, これではまだ不十分だと言う。「現在アメリカでは高校から大学への円滑な移行を支援する初年次教育として, フレッシュマン・セミナーだけでは不十分だとの認識のもと, より総合的な, そして入学前からの継続的なプログラムや取組が導入されるようになった」(同書, 138頁)
- 10 山田, 前掲論文, 261頁.